

私が育った町。

私のふるさととは、大きな家族のような距離感の町民が、今でもたくさんの方々の行事などの文化を町の為に守り続ける、人口250人ほどのいつか終わるゆく小さな農村。長い時間をかけゆっくりと発展し、これから衰退、そして寂滅していく。このまちの記憶をどう残すか、どう町を看取り手向けるかを考えた。

ここで実際に建て替える予定である公民館の建て替えを含めた、まちの記憶を残すまちの中核施設の提案を行う。

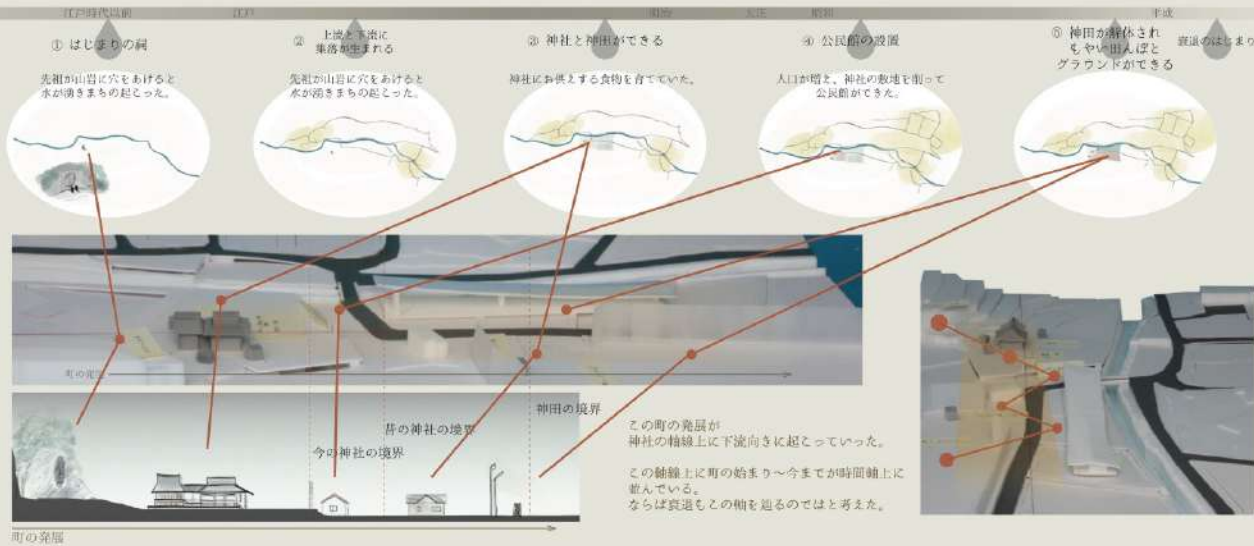
8年前の4月、熊本県で私の実家は亡くなった。18年間育ててくれた地域に何もできず帰るといふ。故郷お世話になったのに家がなくなくなりその町に何も残さない。このまじさ、悲しさこの制作の動機であり、この制作で成郷を亡くなり方と関わりを提案する。

故郷に残る人、文化、ふるまいを集めこの建築によって最期まで看取り、手向ける建築の提案。「さとや」

一 郷 故郷

郷

小さな農村の看取るカタチと手向けるカタチ



町の設置 この町のカタチ

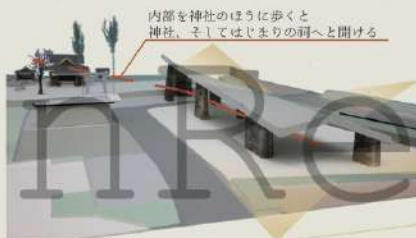
屋根をかける

これまでの歴史を包み、繋げるため祠のはじまりの祠と裏入りの神社本殿に向けて発展の軸を覆うように、まちの歴史に一体感を持って屋根をかけた。

屋根の下でまちの衰退を抑制の軸を張りながら看取っていく。

神社の境界は、神田ができた時に大きく広がり、まちの拡大すると公民館や町内グラウンドが設置によって境界は狭くなった。

衰退（町の縮小）に合わせて発展の仕方で差走するように動く屋根を掛け境界を戻していく



素材

屋根：固く打ったコンクリートは恒久的な建築空間となる

壁柱：コンクリートの外側に土で覆い、時間の経過とともに表面は自然に剥落



現状の課題

■深刻な少子高齢化と若者の町離れ

町年数 一 88世帯 68歳以上 → 131人 (全体の約37%)
人口 一 265人 (男女比 4.9 : 6.5) 19歳未満 39人 (全体の14.9%)

推移としては、5年で30人ずつ減っており、50年後には終末を迎えることになる。

行事 <大規模>	<中規模>	<小規模> 日常
1月 どんと祭り	自治会連 (年4回)	お菓子分け
2月 餅干大祭	美奈もっちゃんの日	健康
3月 自治会の選挙	お遊戯の後の餅つき	ゴミ回収
4月 餅賣会の惣務		こどもが遊ぶ
5月 町内祭		年代別の集まり
7月 川祭		(年3回)の1回〜1.5年前後
8月 スポーツ大会		消防団の集まり
10月 秋の祭大祭		地区の総集点
11月 川祭		

■町民同士のつながり

関係や同世代での繋がりが主であるため、これからの衰退の進行化連れて弱体化していく。

町民の数 → 減
町民の行事 → 減
町民の負担 → 増
文化の継承がこれからは維持できなくなる。

この先の故郷

■まちの衰退に合わせた隣保の統合と町の役割



■日常の中の交流の集約化



0年後 郷 町のふるまいを 残すものも残せる をつくり町を看取る

25年後 郷 この嬉しい 残しかた を考える場所

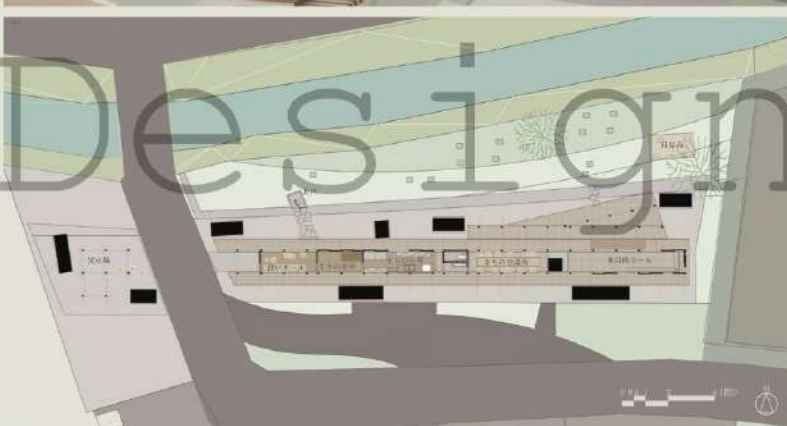
50年後 そして、時が経ち、郷 故郷として 残す

手向ける：まちへお礼する、そして託す時間

看取る：まちのハレとケを記憶する時間

X年後 またいつか誰かの 郷 故郷となるように ここに残る

0年後 まちのふるまいを集める郷の設置



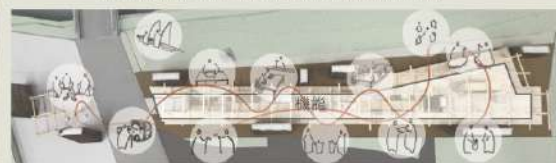
内と外、機能と縁側が縦横に交錯する

内部は機能に対し両側に2本の縁側が人の座る向きで半外部空間になったり半内部空間になる



まちのふるまいが連鎖する

郷の下で機能にまとおるように日常のふるまいが連鎖する



25年後 まちの縮小に合わせた機能の変化

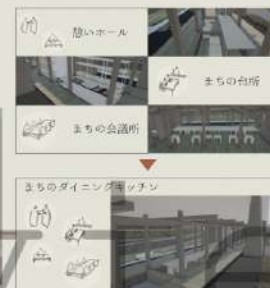
起こる現象として
予想されるもの

- ・高齢単身世帯の増加
- ・一人一人の滞在時間の増加
- ・機能の統合
- ・倉庫利用の増加
- ・団集空間の新設

例) 単身世帯が増え、高齢の単身世帯が団集する空間の新設



例) 憩いホールに縮小したまちの会議所を統合して利用人数が少なくても人の交流を保つ



50年後 看取る場所から手向ける場所へ

まちの終わり

手向けるカタチは、自然に選りにくい恒久的なカタチ

いつになっても人の気配を感じられる場所であるために建築空間として残す。屋根が残ることでそこは建築空間となり、まちの存在を残す。ここへ降り、人の気配が残るこの集場に街の子孫が手向けに帰ってくる。



最期一町に手向ける古材一

人が亡くなった後、まちの人がその人の家に集まってお酒を飲み個人に思い出を贈るように。

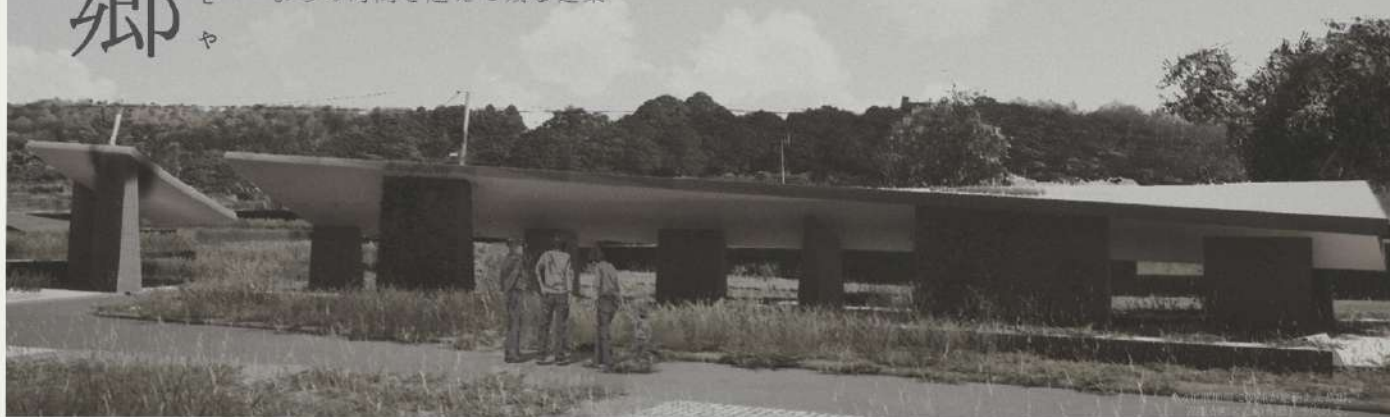
住む人がいなくなった家の古材一つがここへ運ばれる。内部空間または薪き木となり、内部空間も手先火にくべられ、忘れぬ人を温める。

ここにいた時間が染み込んだ古材をまちに手向ける場となる。



郷
さと
や

まちの時間を越えて残る建築



X年後

痕跡、記憶

屋根に残る様、東石、手向けられた古材、屋根は神社そしてはじまりの祠に向けて開く。まちの記憶が残った場所から始まる次の看取り。

郷の存在

郷とは、まちの時間を越えて残る懐しのふる場所

郷とは、はじまりのカタチを残した終末の建築

始まりと終わりを看取ったこの郷がいつか

次の誰かはじまりの場所になりまた誰かの郷となるように

故郷を手向ける。



DesignReview2020

DesignReview2020





DesignReview2020

